



自閉症スペクトラムの理解～TEACCH に学ぶ～ 佐々木正美 先生（川崎医療福祉大学、ぶどうの木）

連続セミナーの第1回目は、佐々木正美先生をお招きしました。自閉症スペクトラム、発達障害と言われる子どもや人たちは、よく似通っているところがありながら、それぞれに違いがあって、様々な個性的な能力・資質などを含めた意味での連続体をなしています。その中でも共通している中核に当たる部分についてお話しいただきました。

佐々木先生のお話は、「理解をよくすることなしに、適切な養育も教育も療育もできない。」という言葉から始まりました。

疑似体験ができない発達障害については、本当の意味で理解するのは、難しい。理解できないけれども私たちは、一般論として、「誰でもこのことはできた方がいい」ということを、いろんな程度にこの子たち、この人たちに強要することがあります。善意ではありますが、いろいろな程度にそれは、「不愉快なともつらい思いをさせることがあり得るということを知っておいていただきたい。」と佐々木先生はおっしゃっていました。

自閉症スペクトラムの人と私たちは、優れている、劣っているということ以上に、ちがっている。いい悪いという問題ではない、という視点から、「理解する」ことが如何に大切なことか、お話がありました。

自閉症の人たちが喜びを感じる、安心を感じる、満足感を感じる、という場面・状況と、私たちが思う環境との間には、ギャップがあります。また、自閉症スペクトラム人たちが理解する仕方と、私たちが提示しているものの間にも、いろいろなギャップがあります。そのギャップが、大きければ大きいほど、自閉症・発達障害の人の方が不適応を起こしているのです。だからこそ、自閉症スペクトラムのその子・その人が、どのようなことなら、どのように感じて、理解するのか、あるいは理解できないのか、ということを知ちらがしっかり理解する。その上で、彼らが、安定して喜んで適応できる場面・環境を作る努力を、いろんな程度に、できる範囲内ですること、そのギャップを丁寧に埋め合わせていくのだということでした。

そして、そういう方法で、一緒に学ぶ、一緒に生きる、一緒に働く、彼らとの生涯の共生を目指す実践プログラムが、TEACCH プログラムであるとのことでした。家庭や地域社会や学校や職場やいろいろなところで、そういうギャップの埋め合わせをしていく、社会全体の取り組みであり、TEACCH プログラムでは、自閉症スペクトラム、発達障害といわれる人たちは「こういう人だから」ということをよく知った上で、そういう特性がどの程度強く、あるいは弱く、中くらいにあるかということから、一人ひとりに合わせた支援をするわけです。そうして、大人になった自閉症スペクトラムの人たちの90%以上の方が、家庭ないしグループホームでの生活基盤をもちながら、地域社会で生活していくことを可能にしているのだそうです。

佐々木先生は、TEACCH プログラムの創始者エリック・ショプラー先生が、常々語ってきた言葉として「あなたの周囲の世界は、こんなに美しい意味があるということをお伝えしたい。」という言葉をご紹介くださいました。また、TEACCHの前ディレクター、ゲーリー・メジボフ先生は、「自閉症の人々と意味のあるコミュニケーションをしながら共生したい。」という表現をされていたとご紹介いただきました。

私たちは、個人であれ集団であれ、発達障害、自閉症スペクトラムの人たちと、お互いにお互いが作り合っている世界と一緒に共有し合いながら、安定して、喜びや幸福を分かち合いながら共存することを目指しています。

佐々木先生ご自身も、「無理解なままに、善意のもとに、そのような誤りを繰り返してきたかわかりません。」「理解できない時の努力というのは、本当はしない方がよかったと思えるような努力なんですね。」とおっしゃることに、理解の難しさと大切さが伝わってきました。

「よりよい理解ができればできるほど、適切な対応や、養育・療育ができるわけですから、とにかく理解するということです。」と、佐々木先生は、理解することの重要性を強調されていました。そして、専門家やご本人の言葉、佐々木先生ご自身の身近な事例やご経験を例に挙げて、自閉症スペクトラムの特性について、具体的にお話ししてくださいました。

先生のお話を伺って、セミナー参加者の中からは、自身の日々の実践の中での悩みを中心とした質問が出されました。

Q&A コーナー

Q; 発達障害の部下と、お互いに苦しむことなく共存するにはどうしたらいいのでしょうか？

A; **人間関係をあれこれしなくてもいい、対人関係を必要としない仕事**につかないといけないと思います。自分の行動が相手にどう感じ取られているかを感じ取る力がないので、周りからするとひどくぶっきら棒で、不愉快になるような行動をしてしまう。悪意やわがままで、わざとそうしているのではない。そうしかできない。そこはわかってあげないと難しいです。そういう意味では、どういう職場にいて、どういう仕事をなさるか、保護者を交えて話し合いができるといいです。お茶を飲むときや休み時間をご一緒るとかいったことを考えておいてあげて、その人自身がつらいことにならないようにしたいです。

Q; 小3で診断を受けた息子が現在高2。思ったことを口にしてしまうので、友だちとのトラブルが多い。本人は一人であることも好きなので、トラブルは相手が悪いと思っていて、困り感がない。SSTを含め、個別指導を受けてほしい旨を伝えるためにも、告知をした方がいいのか？

A; お子さん、ご家族と、通っている学校と、住んでいる町の人と…等、考えながら進めていかななくてはならないと思う。折に触れて何回か、繰り返し伝えてくこともある。例えば、小1、小学校就学時には、本人のこれまでのいろいろな様子を「この時はこうだったよね…」等と、**具体的に、特性のいい面をたくさん伝えて、「こういう人を自閉症って言うんだよ」と伝えるたい。**そして、「こういうことはよくできるから、こういう時はこういう風に考えるといいよ」とか、「何か手伝うことがあったら手伝うからね」と、話しておきたい。さらに、自閉症であることは、悲しいこと、不幸なこと、大変なこと、「思っていない」とも言いません。実際、言うほど思っていないですから。

また、成人の時には、**できることの方をたくさん**、弱いところは控えめに伝えます。幼児期には、大きな価値があるように見えないが、大きくなってくると、その子の特性がいい意味の特性になってくるので、ネガティブな気持ちをもたないで、ゆっくり待っていてほしいと思います。自分自身に否定的になってしまわないように、**胸を張って「僕は自閉症！」と言えるようにしたい。**

自閉症・発達障害という診断名を言わなくても、「特別な特性がある」と伝えることもできます。

Q; 給食を食べない子が、具体的にどうしたら、食べられるようになりますか？

A; **偏食をあれこれという必要はない**と思います。それよりも、食事は人生の喜びとして、おいしく楽しく食べることが大切です。子どもたちが、楽しくおいしく食べられるように、「嫌なものは食べなくていいよ」と伝えたり、子どもが望むものを中心に作ったりすることによって、体質が悪くなるということはないと思います。また、偏食を乗り越えたことが、その子の力になるといったことはないと思います。はっきりした大きな根拠もないのに、子どもに苦痛を強いる教育は避けたいと思います。

Q; 教室を飛び出しては、他クラスのロッカーや靴箱を荒らしてしまう子が、具体的にどうしたら、教室にいられるようになりますか？

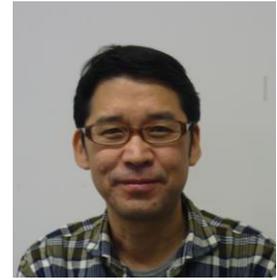
A; 抜け出したくなるくらい苦痛を感じながら教室にいても、その子にとっては得るものはないでしょう。場面の意味がその子にわかりやすく、興味もてるように作られていないから、「教室から飛び出す」という不適応を起こすわけでありです。この子は、どのようなことをどのようにしてあげたら、喜んで課題に集中するのかを考えて、**「この子なら、こんな課題や活動ならやりたくなる」というような特別な課題を用意してみてもいい**でしょうか？算数の時間にお絵かきをしていてもいいというくらい、どういう授業をしてあげればいいのかということ、柔軟に考えてみてはいいでしょうか？

Q; 職場の上司がTEACCHに対して否定的です。特に、構造化を社会に持っていけないから、最終的には外すべきと考えているようです。

A; いろんなことを理解しやすくするための工夫として、構造化の応用はどこにでもあります。特に**視覚的構造化は、世界中どこにでもあります。あった方が適応しやすい**と思います。いろんな世界に行くと、外国の社会での視覚的構造化は助かります。たくさん視覚的構造化は、わかる人には必要ないが、わからない人には価値が高いです。無理やりに、形を整えることや、決まった形を取り外してしまったら、やりにくいでしょう。教師の口数が多いのは、教えられる側からすれば、ストレスです。どういうところは口数をすくなくして、どういうところに言葉を使うか。そういう視点からも、「TEACCHが言うから」というのではなく、子どもや保護者に選んでもらう等して、子どもに合わせて、構造化を取り入れていくのがいいでしょう。

TTAP講習会

6月14日（土）講師に自閉症eサービス理事長の中山清司先生をお招きしてTTAP（TEACCHトランジションアセスメントプロフィール）講習会が千葉のきぼーるで行われました。県内外から福祉施設の職員や学校職員の方など30名にご参加いただきました。



TTAPは、青年期・成人期の自閉症スペクトラムの人達が対象の検査法で、就労や社会生活に必要なとされる様々な機能について、その能力や態度を測定するアセスメントです。検査自体が構造化されており、自閉症スペクトラム者の特性を知るための有効な検査と言えます。今回の講習会では、午前中、TTAPの概要を学び、午後は、フォーマルアセスメントの直接観察尺度を受講生に体験していただきました。

午前中は、TTAPの3つの尺度（直接観察尺度、家庭尺度、学校・作業所尺度）と6つの領域・12項目（職業スキル、職業行動、自立機能、余暇スキル、機能的コミュニケーション、対人行動）の講義を受けました。映像を交えながらわかりやすく検査の方法を教えてくださいました。午後には県内の特別支援学級に在籍する生徒さんが検査者として協力してくださり、実際にTTAPの検査を実施しました。

領域ごとに分かれてそれぞれ検査を練習した後、グループの担当者が交代で検査を行いました。「検査者は、検査を受ける人の特性を出せるような質問の仕方（簡潔で明瞭な言葉）や検査中に把握できた特性（例えば、正解を知らないと落ち着けない等）を検査中も配慮しながら実施することが大切である」と講師の中山先生からアドバイスを受けました。



実際に協力者に検査を実施

その後、評価結果（合格、芽生え反応、不合格）を基にプロフィールを作成し、各グループで、適切な課題の設定を検討しました。TTAPの検査結果から見てきた特性を出し、「芽生え反応」の部分に注目し、課題を設定しました。本人の得意な部分を活かした具体的な支援方法を話合っって具体的に出し合いました。各グループともに検査の具体的項目の結果から手順書やリマインダーが有効であると言った支援方法などがあげられました。

また、保護者には、検査結果を伝えると共に、本人の行動の特徴や今後の優先課題や指導・支援方法を示し、保護者や関係者が活用できるようなレポートを作成することが重要だと話されました。

TTAP検査は、学校を卒業した後の成人生活を豊かにするために「今必要な支援は何か」を探る有効なアセスメントだと思います。また、直接観察尺度だけでなく、家庭尺度、学校／事業所尺度があり、異なる場面でのアセスメントができます。場面ごとの行動を知ることは自閉症スペクトラム者を多角的に知る上でとても有効です。TTAP検査を通して支援者が本人の特性と支援方法を共通理解し、実践していくことが重要だと思います。そして今回の講習会では実施しませんでした。TTAP検査の最も特徴的であるインフォーマルアセスメント（地域でのアセスメント、職場実習等）へとつなげていくことが今後の課題であると感じています。

来年度も中山先生をお招きしてTTAP講習会を実施する予定です。是非、ご参加ください！

検査結果をもとにグループごとに課題、支援方法を検討しました。様々な場所で実践されている受講生のみなさんの意見は具体的でとても勉強になりました。（参加者施設職員）



TTAP講習会協力者の保護者より

先日のTTAP検査ではお世話になりました。
大変勉強になりました。本人は緊張していたのか、いつもよりはずっとお利口さんに課題をこなしていました。本来の本人の問題とするところが出ないこと（慣れすぎると禁句を連発するか）、むしろ彼女の一生懸命に課題に取り組むという良い面が表に出すぎていたようにも思います。初見で会う先生方ばかりですから無理ありませんが、その辺にフォーマルな検査の限界は感じました。
そんな中でも、中山先生が随所で本人の本質を見抜く指摘があったのはさすがだなと感じています。

TTAPは自閉症だけでなく、重度の知的の人にも使うことができますし、現場でのインフォーマルなアセスメントとの組み合わせで成り立っているというところはなかなかアカデミックなものを受け入れにくい現場の先生方にも評価はしていただけるのではないのでしょうか。

検査を受けて終わりではなく、移行支援にどう組み込んで活用していけるか…これからの学校現場の取り組みに期待しています。

新しいスタッフの紹介

今年度から運営委員として千葉県TEACCHプログラム研究会に参加させてもらえることになりました、みずほ学園の遠藤と申します。宜しくお願いします。

私の所属するみずほ学園では、TEACCHを勉強し始めて4年が経ちました。当初よりコンサルタントとして、自閉症eサービス理事長の中山清司氏よりご指導頂き、TEACCHの基本・考え方など、様々なことを学ばせて頂いています。平成24年度より、中山清司氏のご紹介で、神奈川県立保健福祉大学助教授の岸川学氏にもご指導頂き、一人一人の利用者さんのケースなどの、具体的な対応・考え方などを学ばせて頂いています。

千葉県TEACCHプログラム研究会の連続セミナー等には、平成24年度より積極的に参加させて頂くようになり、学園の職員全体の意識が高くなりました。セミナーで刺激を頂いた職員が中心となり、「どうすれば利用者さんに伝わるのか」「どうすれば理解しやすいのか」と利用者さんの立場になって考えられるようになってきました。今年度からは運営側も勉強させて頂き、今まで以上に良い支援に結びつけていけるよう、勉強させて頂こうと考えています。力不足ではございますが、宜しくお願いします。



(遠藤雅史)

平成26年度 TEACCHプログラム研究会 第3回連続セミナーのお知らせ

期日：平成26年9月27日（土）13:30～16:30

場所：千葉商工会議所大2ホール

演題：「PEP-Ⅲの概要について」（仮題）

講師：三宅篤子 氏

（編集後記）最近現場で強く感じることは、一緒に支援する人とどうすれば共通理解がスムーズに進められるかということです。具体的な支援の統一が不可欠です。職場の同僚同士はもちろんですが、保護者や地域の人たちとの連携も大切です。TTAPで学んだことを実践で活かしていきたいです。

（吉村 奈津江）